

氏名	梁取 里		
ヨミガナ	ヤナトリ サト		
学位の種類	博士（音楽）		
学位記番号	博音第301号		
学位授与年月日	平成30年3月26日		
学位論文等題目	（論文）	G. マーラーの歌曲に遍在する言葉と音楽の関係 — G. マーラー《子どもの魔法の角笛》歌曲集の楽曲分析と演奏法の一提案 — G. Mahler. 《若き月の歌》よりFrühlingsmorgen春の朝、Erinnerung 記憶 他	
	（演奏）	《子どもの魔法の角笛》より Rheinlegendchen ラインの小伝説、 Lob des hohen Verstandes 高き知性を讃えて 他	
論文等審査委員			
主査	東京藝術大学 教授	（音楽学部）	永井 和子
副査	東京藝術大学 教授	（音楽学部）	平松 英子
副査	東京藝術大学 教授	（音楽学部）	檜山 哲彦
副査	東京藝術大学 名誉教授	（音楽学部）	寺谷 千枝子

（論文内容の要旨）

筆者が初めてグスタフ・マーラーの歌曲に出逢ったのは、大学院に入学して間もない頃、大学の奏楽堂で行われた G. マーラーの《子どもの魔法の角笛》のコンサート前にプレトークがあり、その際に演奏する機会をいただいた時であった。マーラーの歌曲に初めて触れ、楽譜を読み進めていくうちに、同時代の作曲家と比べ突出した異質感と、聴き手の立場に立った時の歌曲の印象的な旋律に、否応なしに惹きつけられた。と同時に、彼の歌曲に対する、人を惹きつけて止まない「違和感」への疑問と、歌い手の立場から捉えた彼の歌曲に対するアプローチの難しさ、また高度なテクニックの必要性に苛まれるようになった。それ故、筆者の博士課程において、「魅力」と「違和感」を兼備するマーラーの作品への追究を、大きな研究課題として掲げることとなる。また、演奏者の一人としてリーダーアーベントの際、いつも課題として考えていることがある。例えば、母国語ではない歌曲を演奏する際であっても、外国語の歌詞とそれに付曲されている音楽との融合性の魅力を、聴き手に楽しんでいただきたいという思いを持っている。日本において、日本語の作品を演奏する際、聴き手になるお客様の大半が日本語を母国語にしているか日本語に親しみを持っている方ということが多くであろう。しかしドイツ語や他の外国語の歌曲を演奏会のプログラムに入れている場合は、少しでも海外の作品に親しみと興味を持ってもらえるように、その曲の本来の魅力を伝えられるよう、演奏者側に大きな課題が常にもたらされている。聴き手が音楽と言葉（ここでは特に母国語以外の作品を指す）を楽しめるように工夫をすることは演奏者の使命だと、筆者は考える。この課題と向き合わない限り、聴き手側の「この外国語はわからないから」という理由で、日本において更に海外の歌曲作品を演奏する機会が減り続けていくと危惧している。

また、今日世界中で、リーダーアーベントにおける様々な試みが行われている。筆者もドイツ留学中に、「立ち」などがついた、オペラに近いリーダーアーベントを観た経験がある。歌曲以外に様々な趣向が凝らしてある舞台であったが、終演後もの足りなさを感じたのだ。それは何故だろうか。演奏者側が、歌曲の魅力でもある物語を想像できる「柔軟性」を聴き手から排除してしまったからではないだろうか。

これらの今までの経験を活かし、博士学位審査の際に採り上げる G. マーラーの《子どもの魔法の角笛》に焦点を置き、音楽分析を基に聴き手と演奏者、両立場に立ち、演奏者が作り出す世界と聴き手が想像する「柔軟性」を兼備する演奏法の一提案を追究する。

本論文第一章ではマーラーの《子どもの魔法の角笛》のピアノ伴奏版とオーケストラ伴奏版の比較分析を行った。その際に、Renate Hilmar-Voit 『Im Wunderhorn-Ton』の第1章“Die Liedertexte und ihre Vorlagen in “Des Knaben Wunderhorn” :”に記されている、G. マーラーの《角笛》歌曲における詩内容分類概要から、今回音楽分析をする歌曲を選曲した。比較分析における着目点は、まず一つに、オーケストラ伴奏版とピアノ伴奏版における主な相違点、音、和声、指示記号などについて、二つ目の着目点は、マーラー作曲時の各楽曲の手稿または初版との重要な相違点について、研究を進めることにした。

第二章においては、ドイツ民謡詩集『子どもの魔法の角笛』の原詩と民謡旋律の音楽的要素の反映について追及し、歌曲の原詩とマーラーが改変した詩を並べ、詩の特徴と重要視すべき点を探っていった。同章第2節においては、元の民謡旋律の《角笛》歌曲における音楽的要素の反映と題し、Hg. von Erich Stockmann, Des Knaben Wunderhorn: in den Weisen seiner Zeit. Akademie-Verlag = Berlin, 1958.に記載されている、民謡詩集『子どもの魔法の角笛』の詩の、元の民謡旋律の音楽的要素が《角笛》歌曲でどのように反映されているか分析を進めていった。

第3章では、前章までの音楽比較分析を基に、《子どもの魔法の角笛》歌曲の演奏法の一提案をしている。更に終章においては、マーラーの《子どもの魔法の角笛》においての特徴と、演奏者として楽譜を読み込んでいく上での留意点について総括を記している。そこで筆者が述べていることは、演奏者がマーラー作品の譜面を読み込む際の留意点には、目に見える要素と、目に見えない要素が存在する。対極関係にあるこの2点について注目することがマーラーの作品を演奏する上での大きな鍵となる。それを見つけ出すことが出来た時に、聴き手にとっての言葉から想像する「柔軟性」を生み出し、演奏者としてその歌曲の大きな魅力を提供することが出来るのだ。

（総合審査結果の要旨）

〈論文〉申請者がG. マーラー歌曲から感じた「違和感」への疑問と、印象的な旋律の源。その解明と歌唱に求められる要素を《子どもの魔法の角笛》歌曲集を取り上げ研究した論文である。第一章でピアノ伴奏版とオーケストラ伴奏版の比較研究。第二章 原詩と民謡旋律の音楽的要素の反映についての追求。第三章 前章までの音楽比較分析を基に演奏法の一提案

をしている。終章で演奏者として読譜時の留意点について、総括している。まず論文としての手続きが整っている。伴奏版の比較からはピアニストと共に自身の演奏に活かされる多くの材料を引き出して有意義な内容である。「違和感」という歌手としての仮説の提示からその解答へと至る道筋には多少の強引さもあるが申請者の演奏家としての立ち位置が貫かれていて説得力を持つ。作曲家マーラーとの対峙が生きている論文である。

〈演奏〉G. マーラー《若き日の歌》より4曲。《リュッケルトの詩による5つの歌》全5曲。《子どもの魔法の角笛》歌曲集より6曲をピアノ伴奏で演奏。(2月13日第1ホール)

これまでのリサイタルからすると発声面での成長が見え、演奏表現にもびやかさが加わるようになったが、マーラーの世界観を表現するまでに至っていないのが残念である。

論文執筆で深い研究を成し得たのであるからこそ机上の発見に留まらず、マーラー作品への想像力を、演奏上の創造力へと繋げる作業が欲しかった。そこには土台となる声楽面の基礎の鍛錬が必須であり、申請者にとってはこの学位演奏がむしろスタートとなり、今後への活力になる機会であったと言える。

以上、4名の審査員により「合格とする」に値すると判断した。